
絶対青春物語

猫山

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

絶対青春物語

【Nコード】

N4033V

【作者名】

猫山

【あらすじ】

愉快で馬鹿な高校生。

そんな彼等の面白可笑しな、でもちよつとシリアスなお話。

0・5話

……。

あ……つい……………。

夏とはいえこれは暑過ぎる。まるで体内から熱が発されているかの様な暑さだ。これが現代版地球温暖化というやつなのか？

「違う上に、勝手に地球温暖化のせいにするな、このドアホ！あんたが急に筋トレなんて始めたからでしょ！——てか、汗臭っ！絶対それ以上近寄らないでよね」

手をパタパタ上下に振り、顔を真っ赤にしてなにか喚いてる。この反応……中々面白い。

「ひどいなー、千草は。——それよりどうして俺の心の中が読めたんだい？もしかしてエスパーなのかな？だとしたら次にその力を見ることになるのはテレビの中かー。あーあー、君がどんどん遠い存在になっってしまうよ」

続け様にほんの少しからかってみた。若気の至りってやつ？それなら。

「ひどくない！口に出してたの分かってたくせに。それと私にあまりちよっかい出してこないでくれる——ほんと不愉快だから」

「ほんと腐女子？あはは。分かってるよそんな事。君と何年共に

過ごしてるとゴフツ——」

割と本気で腹を殴られた。意外と痛い。亀田もビックリなストリートパンチだ。

「次変な事言ったらぶつ殺すからね。あと、最初の一文以外全部間違ってるから！」

「でも全部本当の事だけどね、あはははは」

……あれ？おかしいな？急に黙って教室から出て行っちゃった。もしかしてすねたのかな。

「タスク、お前早く逃げろ。チーの姉御がチェーンソーを持って帰ってくる前に」

「なに言ってるんだよ、浅葱。チェーンソーとかジェイ・ンじゃないんだから。非常識にも程があるよ」

「確かにそうだが、しかし、ほれ——」

ひとさし指を校舎の外、運動場の方へ向ける友人。……ふむ、あれは……。

「あれ、俺もしかして相当ヤバイ？」

「ああ、下手したら死んじゃうかもな」

「「……………」」

「うわあああああああああ、女子生徒がチエーンソー持って廊下を走ってるぞ！」

「.....」

——その後。

友人と熱い抱擁をかわした俺は三回の教室から地上へとダイブしたのです、まる

一話 前編

あー。昨日は本当にひどい目に遭った。危うくプロローグから本編へ入るまでの間に主人公の髪が消失しまうなんていう、ラノベ史上類を見ない展開を迎える所だった。あぶないあぶない。

「ふん。自業自得よバカ」

と、昨日の出来事を目の前の友人、浅葱と話していたら突然後ろから鋭い罵声が飛んできた。わざわざ相手を確認するまでもない。話題の主の香具山 千草だ。

「やあ。今日も随分ご機嫌斜めな様子だね千草」

「黙れ。きやすく私に話しかけんな。しばき倒すぞ」

「またまた照れちゃって……。でもそんな君も俺は可愛いとおも——っ！」

ゴスツ。まるで人体に鉄バットを叩きこんだような鈍い音が、爽やかな朝の教室に響き渡る。

「忠告はしてたんだからね。ふざけたあんたが悪いのよ」

床に突っ伏し動けなくなった俺に鬼のような一言が告げられる。今回ののはふざけたわけじゃないのに……。うつ。体も痛いけど心も痛い。

「はあ……。お前もお前でつくづく大変だな」

唯一、友人の優しい一言が俺の傷ついた心を癒す。やっぱり持つべきは友だよね。うん。

——そうこうして。ようやく体の痛みが引いてきた俺は、再び浅葱と雑談を始めた……。のだが。

「そういえばタスクってなんでチーの姉御の前であんなふざけた口調になるんだ？ いい加減教えてくれよ」

うーん。困ったことになった。さすがの俺もこれには言葉が詰まる。これを話すには彼女——つまりは千草の許可が必要になる。まあ、嘘でもついて適当にこの場をあしらう方法もあるっちゃあるが……。かといって冗談任せにふざけて言ったのを千草に聞かれてもしたら、昨日の二の舞になりかねない。

……なら考えられる答えは一つ。

ここは強引にでも話題を逸らすしかない——。

よし。そうと決まれば早速実行だ。何事も早くするに越したことはないからな。

「話が長くなるから止めとこおうぜ。そんな事よりもこの前のゲームだけどさ——なんだよあれ。すげえ面白かったぞ」

「あ、ああ。あれな。この前ゲームの雑誌で見つけて買ってみたんだが——予想よりも中々当たりだったからオレも驚いた」

「いや、中々ってレベルじゃないだろ」

「はは。確かにそうかもな」

何とか話題を逸らす事には成功した。けど、やっぱりまだ不満そうな顔つきが見て取れる。

仕方ない……また変な事を聞かれる前に先手を打とう——。

チラと時計を確認。……八時十分か。ホームルームまでに戻れば大丈夫だな。

「——あつと。そういえば俺、昨日先生に呼び出しくらってたんだった」

「……え？」

「話の途中で悪いんだけど——ちよっくら行って来るわ」

「お、おお分かった……廊下は走るなよ？」

「お前は先生かつての」

最後にふざけた会話を交わし、俺は教室から何もする事のない廊下へと出た。

一話 中編

私の耳は半端なく良い。友人には地獄耳とさえ呼ばれているほどだ。

そして。それは特に、自分に関係する話をされている時に発揮される傾向がある。良い話だろうが、悪い話だろうが、だ。

ただしこれだけでは国語の成績が著しく低い人には、私が何を言いたいのか解らないかもしれない。そんなユー（誰？）らのために、このミー（初登場から大分キャラ変わってない？）が直々に教えてあげるとしよう。

それは、ほんの十五秒程前。場所にして第一話前編の中間らへん。

そこを、さらに重要な要点だけをピックアップして抜き取るなら、

「そういえばタスクってなんでチーの姉御の前であんなふざけた口調になるんだ」

ってところ。どう？理解してくれた？

「ちー、さっきから一人でなに言ってるの……大丈夫……？具合が悪いんなら保健室に行った方が——」

——んなつ、さっきの独り言全部口から洩れてたの？嘘でしょ？——なんて、自分自身への無駄な問い掛けよりも早く目の前の友人に訂正しないと。友人の心配そうな目が、保健委員の方へ向き始め

ている。

「いやいやいや！大丈夫だから！ちょっと独り言が多いただけだから！気にしないで、ねっ？」

「……それは……あまり大丈夫じゃないと思うけど——まあ、ちーがそこまで言うなら」

という友人の目は未だに心配そうに私を見つめている。——それもこれも全部佑のせいだ。あいつの独り言の癖が知らず知らずのうちに私にも伝染してしまったんだ。きつと。

——閑話休題（という名の精神回復タイム）——

……さてと、話を続けますか。

とりあえず恭介には、そうね。こういう生半可な知りたがりが後でどうなるかきつちり体に教え込んであげないと。（私に恥をかかせた罪も込めて）

……けど、そのお陰で久々に懐かしい思い出を思い出した。佑が私に対してだけ、なんであの口調になるのか。その理由^{ワケ}を。

そして。

その時、私と交わした約束も——。

一話 後編

——とりあえず職員室まで向かう階段のなか、俺は効率よく時間を潰す方法を考えていた。

(……とはいっても。元々、後先考えずの行動だしな……)

——結局、答えを出せず仕舞いのまま一階まで足を降ろす。

見た所、一階の下足室にはまだ生徒がたくさん残っていた。おそらく、登校組と朝練組のどちらかだろう。……でも、今の俺には関係ない。俺のクラスの連中は全員八時には既に登校し終わってる。それに後者の方は、帰宅部の俺が言うまでもない。

仕方なく、廊下へさらに歩みを進めようとしたその時。職員室と下足室の間に置かれた姿見に、誰かを尾行する様な形で行動する見知った女子を見つけた。

(退屈しのぎキタ

(。。

!!)

多分、その時の俺の顔はひどいものだったと思う。……けど、仕方ないよね？

俺は彼女を密かに尾行する形になるために、こっそり朝の人混みに紛れつつ職員室と下足室の間を通り、もう一度下足室から廊下へ入ったはず……なのに……あれ？彼女の姿が見あたらない。もしかして俺の事を尾行してたのではなく、ただ単に職員室に用があったのか？だとしたら、今までの俺の勝手な思い違いって事になる。

「……自意識過剰もここまで来るとなんかなあ……」

「——なんなのですか？」

………っ！？声にならない声が、一瞬、悲鳴として俺の口から出なかった。

「先輩に行動がバレてたのには気づいてたですよ。鏡の中で目が合いましたし。それにしても、はあ……。先輩はそろそろ私の気持ちに応えて欲しいです。毎晩、枕を濡らす私の事も少しは考えて欲しいです」

「よ、よお。ヒナ」

こいつは一年の白山 雛。なぜか入学して三日後、俺に告白しに来た後輩。顔の造りが千草に少し似ている。——つか、驚かそうと思ってた本人が逆に驚かせられるなんて。しかも女子に。泣きそうだ。

「こんにちはです、先輩。——でも、出来ればそんな朝の挨拶よりも私としては早く愛に満ちた告白を聞かせて欲しい所です」

「……そうだな。……じゃあ、こんな所でだけ聞いてくれるか？」

「縦横斜め三百六十度バッチこいです！」

どついう角度なんだろ、それ？今度ネットで調べておこつ。

「残念だが、お前の気持ちには答えられない。俺にはちゃんと好きな人がいるんだ。だから、諦めてくれ」

「……何回この件くんだりをするつもりですか？そろそろ飽きてきたです」

「理不尽な物言いだな、オイ！」

数は……もう覚えてない。ただ、百回は軽くいつていると思う。

「……そんなに千草先輩が良いんですか？どうせ告白しても振られるだけです」

「お前は俺の心を傷つけて楽しいか」

「別に、です。そんなに本当のことを言われるのが嫌なら、潔く私と付き合いばいいんです」

「……なあ」

「なんです」

「……どうしてだ」

「……なにがですか？」

「なんでそこまで俺と付き合うのにこだわる」

これは、彼女に付きまとわれてきたからずっと感じていた疑問だった。自分で言うのも少し悲しいが、俺の顔はそこまで良い造りではない。さして、それを補えるだけの取り柄もない。それなのに、

だ。

——なぜ彼女は、ここまでして俺と付き合いたがるのか？

これには絶対何か裏がある。そうは分かっているものの、どうもあと一步が掴みきれない。それに今も、

「それは……」

と、ばつが悪そうに口ごもってるヒナを見ると、あながち俺の勘の全てが外れている訳でもなさそうだ。

俺たちの間に、気まずい空気が流れる。が、その空気は、以外にも呆気なく一つの音によって消え失せた。

——キンコンカーンコン。

タイミングの悪いホームルームを報せるチャイムが鳴り響く。

「……時間も時間だし今日はここまでにするか」

「そう……ですね……。では、先に失礼させて頂きます、先輩」

「ああ。急いで行けよ」

「はい」

とつとつと、と本当に急いでいるのかわからない速度で駆け出す後輩。その背中を見送りながら、俺も教室へ向かうために全力で駆け出すのだった。

一話 後編（後書き）

ニューキャラ登場です!!

名前は白山しんやま 雛ひなちゃんです。

多分これからの話で重要なキャラになる予定です。

二話 前話 ？

——なんでこんな事をしてるんだろう？俺は目の前で繰り広げられる、タイムセールという名の地獄に身を投じながらそんな事を考えていた。

もはや戦場と化した総菜売り場。もはやハイエナと化した主婦達の群れ。そこを必死の思いで掻き分け、半額シールの貼った唐揚げパックを手に入れる。

そこで、ハタと思い出した。

——そうだ。

あれは……確か、数十分前——……。

すっかり夕日に染まった教室で、友人の浅葱と今朝のゲームの話で盛り上がっていた時だ。まるで告白のシーンないし、緊張した面持ちで俺の所にとことやって来る千草。そこをあえて気づいていないふりで通し、何を言ってくるのかちょっぴり期待して待っていたら——。

「あのね……ちょっとあんたに話したい事があるんだけど、ここじゃ少しあれだから……」

ヤバかった。一瞬自分の脳が処理落ち仕掛けるほどにヤバかった。

「ああ……千草もようやく自分に正直になったんだね。これから君の彼氏になる身として、心から嬉しくおもうよ」

「……こつちがわざわざ下手に出てあげたっていうのに……！もういいわよ！とりあえず早く帰る用意して！いつもみたいにあなたの馬鹿発言にかまってる時間がないの！」

……はて？

……時間？

それは一体どういうことだ。告白に時間が必要ということなのか？確かにタイミングが重要というのは知れた事だが……。

……——っ！

そうか！

彼女は夕日をバックに屋上で二人きりの告白をしたかったんだな。そのうえ。そのシーンには必ずいる、定番とすら言つていい『扉から見つめる生暖かい野次馬の視線』を演出するためにわざと人が残っている放課後の教室で俺に告白まがいの事を……。

ならば、その彼女の期待には応えなくてはいけない！なぜならそれが紳士の務めというものだから！

「タスク。現実逃避もいいが、いい加減現実を見つめろ」

——やめて！俺のささやかな夢を壊さないで！まだ希望を捨てさ

せないで！

と、涙目で懇願する俺を無視し、浅葱は尚も軽快な口調で喋りだす。

「おそらくチーの姉御の事だから、私的な……それも男が必要になる重労働な用事。そこにお前を使つつもりなんじゃないか？」

その言葉に、ふいと視線を落とす千草。

「え？本当にそうなのかい、千草」

居心地が悪そうに黙る千草。まるで、今朝のヒナとの会話をして
いるようなデジャブ感だ。

「千草？黙ってないでなにか言つてよ。ちぐ——」

その時、俺の体に何かが走った。そう、まるで電撃のような……。

——そこで、俺は意識を失った。

そして。

この現在に至るという訳だ。

ついでに一つ付け足しておくなら。俺が目を覚めたのは戦闘のど真ん中で、手の中には『唐揚げ手に入れてなかったら、代わりにあなたを鳥にしてあげる？』という意味は解らないが、とりあえず

物騒な置手紙があつたとか
なかつたとか……。

二話 前話 ? (後書き)

ついでに彼の意識を奪ったのはスタンガンです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4033v/>

絶対青春物語

2011年10月9日04時02分発行